

エピソードその3 やることの幅が広がる日々 自分らしく生きる仕事



噴水準備中
by 川辺悟史さん

○涌井さん 「フルタイムで就職し10キロ体重が減りました。仕事も人間関係も強烈で、キャパが狭く休み出られないひきこもりの頃に近く、でも余裕をもたせようと思っています。働いてから5か月、だいぶ慣れてきましたが結構疲れましたね。前から働きたいと思っていたんですが、ハローワークに行くだけで動いてなかったです。そろそろその先の一步を踏みださないといけないじゃなく、踏みだしたいなと思って踏みだし働くようになったんです。親のこととか経済的なことも考えますが、一番の理由は自分が自分らしく生きるです。働くことで得るものが多いです、見えない部分で。賃金を得るとか、「何やっているの？ 働いてます」と言えるとかではなく。少ない給料ですが、結果的には

やることの幅が広がりました。昔やっていたバドミントンを地域で中学生と、また職場でも再開しました。仕事は病院の管理業務。(高橋さん「そこで3回手術したわ」) スポーツ医学で有名。松坂大輔さんも来ます。

今日久しぶりに参加して、「こういう人の考え方」「自分と一緒に」と自分の考えで判別する、やっぱりいいですね。こういう場があることは。今日も改めてそう思いました。違った意見も別に「何で違うんだよ！」とは思わないですね。同じ意見には僕と同じだと思えますね。

エピソードその4 チャレンジ3回目 年金 & 保険 発信することと勉強

○川辺悟さん 「ラストチャンス、5年生を3回目やっている。新たな挑戦、仲間に応援され感謝です。歯科医師、国家資格へ向かう厳しいハードルを実感。」

○田中さん 「一番の苦手は人前で話すこと。しかしフット湧いた3・22コンサート司会の話にチャレンジ、無事に終わってホッとしています。娘との会話で年金・社会保険の支払い？」

○川辺順さん 「コンサートは楽しくホッとできパフォーマンスに感動しました。この会が存続し龍崎さんが進めて頂ける、良かったです。自分が生きてきたことを含めて発信していきます。」

○古川さん 「勉強しなくちゃ、でも活字には弱くて。NHK のうわさの保護者会を見ても難しいな…。娘もフルタイムの仕事で夜勤も、家事と孫たちの学校を応援中です。」

コラム風 分からないことは若者に聞く Be you 研修会感想より

NPO 法人よこはまチャイルドライン、子どもたちの声をリアルに受け止める歴史ある電話相談ボランティア団体で「ひきこもり支援」のお話を4月13日(土)させていただきました。居心地の良い穏やかな視線に見守られ、質問も含め3時間しゃべり倒し(笑)…僕自身、学び多い時間でした。ひきこもる背景、社会環境と法整備の実態、理解から共生へ若者の生き方に触れながら進めました。「分からないことは若者に聞く」、僕の現場主義を根幹にして。参加者の貴重な感想を頂きましたので、失礼とは損じますが以下に紹介しフィードバックいたします、御容赦をお願いいたします。



□社会現象としてのひきこもりについて拝聴し、社会とうまくいかない？ 家庭環境？ コミュニケーション障がい？ 種々な原因によるものと知り理解を深めることができました。人は二面性があるもので、それが無いこと(正直すぎる?)によって人と対面した時に障害が起きるという

のも驚きでした。要因や背景が多様で複雑であることは子どもにとって生き苦しさも感じるであろうと思います。自己再生していく過程もすごく、周りの方々に寄り添い導かれ助けられて立ち直っていく姿は奇跡的とも思えました。受け手ボランティアとして電話を受ける時の姿勢、向かい方に気をつけたいと心に留めました。盛りだくさんでした。

☆ひきこもりについて様々な事例から沢山のお話をお聴きしました、まだまだ入口のように感じる



る時間。●ひきこもる⇒それは自分の理解、自分づくり・自己再生 ●ひきこもりはチャレンジャーである ●これでいいのだ！と言える自分 ●自分は自分、自我形成が人の優しさを育てる ●注生きていくだけでまるもうけ ●今、今を生きよう どの言葉も心に残りました。 ※注：西野博之さん(NPO ひだまり)の名言から引用しました

○ひきこもりに至る心の葛藤を一つ一つじっくりと寄り添うしかないと思っていました。私たちの世代は同じことを同じようにできない子を排除してきた世代であり、私自身なかなかその教育を受けた経験を取りさることができるか課題です。注人薬を忘れずにしていきたいです。 ※注：齊藤環氏(精神科医)がうつ病回復提言を引用しました

▽ひきこもりは自己防衛であるという点が一番印象的なことでした。ひきこもりは、その人が(社会に)適合しようとするための行為と理解すれば、ある意味、そのままでもO.K.なのかなと思えました。現在キャリアコンサルタントをめざしていますが、中高年のひきこもりの方々の支援を行う上で、基本的スタンスとして、「Be You」を大切にしていきたいと思えます。

◇滝田さんのお話はどれも心に響くものでしたが、一番印象に残ったのは「子どもたちに教えられている」というけんきょなおことばです。支援しているという立場ではなく子どもと共にいるというように聞こえましたが、そのような感じ方はどうなのでしょう。子どもの電話を受けている時、「こうした方が良いのでは」という態度でなく接していくには、まず受け手である私たちが多様な価値観をもつことが大切と教えていただきました。

☒コミュニケーション障がいを前向きにすすめる為の方法は「コミュニケーション」である。本当にその通りだと思いましたが、但し、相手に合わせた多様なコミュニケーションが必要で、共感できるきっかけをつかむまでには時間を要する場合も多いということも実感しています。何がきっかけになるか、進む度合いも人それぞれなので、急がずせかさず対応を続けていく必要があると改めて感じました。

▽滝田さんのテンポよく歯切れのいい研修にはまりました。まるで楽しい社会科の授業を聞いている感覚になりました。ひきこもりとひとくくりにはいけない、ひきこもりになった社会的背景や特性や環境など様々で、誰にでも起こりうる。「インプットは可能、アウトプットが難しい」子どもたちを偏見を持たずに、コミュニケーションで関わっていくことの大切さを知った。焦らず、ひきこもっている人の良い所をみていく、Be you という滝田さんの姿勢に感動しました。「ひきこもりはチャレンジャーなんだ」ですね。

なお当日の資料に、社会的ひきこもり統計をまとめてみました。内閣府は3月29日調査結果を40歳～64歳61万人を発表、4年前調査で16歳～39歳54万人、計115万人(注3年重複するが)。又この調査から、半年から1年でひきこもりを終わる人が半数、一方年代は均等に広がりどの年代でもひきこもる。原因も社会参加の方向も多様であることが分かった。そして、7歳～18歳の不登校は約20万人いる事実も存在しつづける。(滝田衛)